バイオ哲学対話 実施報告 ～動物行動としての恋愛を哲学する～

テーマ：ロボットや 2 次元キャラクターとの結婚を制度として認めてもよいか
実施日：2019 年 4 月 25 日（木）

帝京大学理工学部バイオサイエンス学科で開講している「行動神経学」（担当教員：平澤孝枝准教授）の第 3 回目の講義において、同学科 3 年生を対象に哲学対話を実施しました。
この講義は、野生生物や人間の振る舞いを脳神経科学や動物行動学の見地から考察し、専門分野に関する知識と思考力を深めることを目的としています。3 年次は、卒業研究に向けて自分たちの問題意識や研究テーマを見つける大事な時期です。他方で、学生たちにはなかなか「問い」を見つけられない、思考を深められないといった傾向が見られます。そこで「問い」を発見する力と、問題を掘り下げる力を養うため、哲学対話の手法を導入しました。哲学対話を実施するにあたり、第 1 回目の講義では対話を行うための雰囲気作りとし、第 2 回目の講義で分類法・連想法などを用いながらコンセプトマップを作成し「問いづくり」の方法を学習しました。

講義開始後、冒頭の 20 分程度で、ファシリテーターである総合基礎科目講師 江口建が哲学対話の趣旨や進め方についてレクチャーし、約 50 分間の対話を行いました。
今回のテーマを決めるにあたり、まず、第 1 回目の講義後に提出された学生たちのワークシートから学生たちが興味のある事象を①一夫多妻などの「婚姻形態」の問題系、②「恋」と「愛」の問題系、③「倫理」や「モラル」の問題系、④「感情」の問題系の 4 つに分類しました。さらに、それらを第 2 回目のワークシートと突きあわせたうえで大きなテーマとして「**動物における恋愛とは何か？**」というテーマを導き出しました。

次に、それについて考えるための切り口となる具体的なテーマの 1 つとして「**ロボットや 2 次元キャラクター（アニメやゲームの登場人物）との結婚を制度として認めてもよいか？**」という、現代的かつ学生たちにとって身近なお題を考案しました。それについて考えることを通して、生物に見られる繁殖システムや性行動、婚姻、求愛行動、社会性、個と集団といった諸問題に多角的にアプローチするための観点を獲得することが目的です。何度かの対話を経て、最終的に学生たち自身が問いを見つけ、それをレポートにまとめ完成させます。

当日は 2 つのグループに分かれ、哲学対話を行いました。

【グループ A】ファシリテーター：江口 建
賛成： 10 人　　反対： 16 人

まず、賛成派が理由を述べ、そのあとに反対派から質問をあげてもらい対話を進めました。

【賛成派の意見】
①海外では「壁」との結婚もあるくらいだから、アニメキャラクターとの結婚くらい何の問題もないように思える。

②ロボットやアニメキャラクターでは対話は無理だろうし、子どもを授かることもできないだろうが、本人の中に喜びがあればいいのではないか。
③現代では同性婚が認知されつつあり、同性婚を認める時点で、もはや子ども（を授かるかどうか）は問題ではなくなっていると思う。

【反対派の意見】
①2 次元との結婚を概念としては認めてもいいが、制度化する必要はない。
②あるゲームのキャラクターに人気が集中したとき、その 1 人の人気キャラクターに多くの人が求婚したらどうなるのか。取り合いが起こるかもしれない。戦争や争いが勃発する可能性もある。キャラクターにとっては重婚ではないか。もしも子どもが出来たら遺産等の問題はどうするのか。
③上記とは反対に 10 人のキャラクターと結婚したいときはどうするのか。

⇩⇩⇩

【上記②に対する賛成派からの異論】
学生：人それぞれ好きになる部分が違っていて、自分の中のイメージのキャラクターと結婚すればいい。実際、そういうことになると思う。それができるのが 2 次元の良さ。「私から見た、このキャラクター」に、それぞれ求婚すればいい。つまり、実物は 1 人だが無数のイメージがある。

これはつまり、自己の中にある観念との結婚ということになるのでしょうか？しかし、その状態であれば、あえて結婚する必要がないのではないでしょうか？そのような疑問が浮かびます。
ここで、反対派から上記の意見に対する異論があがりました。

【反対派の異論】
学生：私は無理。独占欲が強いので、他の人と共有するのは嫌だ。他人のものになってほしくない。

⇩⇩⇩

【賛成派の意見】
学生：しかし、一夫多妻制というのはそういうことではないか。2 次元の場合取り合いがない。これが 2 次元の良さだと思う。2 次元のキャラクターには求婚されても拒否権がない。だから誰でも求婚できるし、全員と結婚してくれる。

⇩⇩⇩

【反対意見】
学生①：問題を後回しにしているだけでは？例えば遺産問題など。
学生②：素朴な疑問だが、すでにアニメキャラクターが他の人と結婚していた場合、浮気になるのか。
学生③：全員と結婚せずに、親（＝制作会社や著作者）が相手を選べばよい（いわば、「お見合い」における品定めのようなもの）。
学生④：キャラクターと結婚するということは、肖像権を含めてすべてを買い取るということ。それが可能なのか。

⇩⇩⇩

【④に対して】
学生：それを可能にするための制度化なのでは？　現実でも結婚したら名字が変わる。

⇩⇩⇩

【反論】

学生：では、結婚したら名前や容姿を勝手に変えてもいい？　制作者の手を離れて、キャラクターが勝手に改変されることはいいのか？

学生：この制度には、そもそもメリットがないように思える。本人が満足していれば、それでもう十分なのではないか。

【ファシリテーターからの問いかけ】（以下、ファ）

ファ：もし人工生命の技術で 2 次元キャラクターと人間で子どもが作れるようになったらどう思いますか？

⇩⇩⇩

学生：どういう状況なのか。人間とキャラクターのどちらが産むのか。人間なのかロボットなのか。女なのか、男なのか。パソコンとの間でどうやって子どもができるのか。

⇩⇩⇩

ファ：ロボットなら人工生殖の技術で、人工培養・人工出産できるようにする。2 次元ならプログラミングをしたらいいのではないか。それを VR の技術で 3 次元化する。人工知能を搭載し、自己学習しながら成長する。ヘッドギアを装着して脳神経と接続すれば、触れるし体温も感じる事ができる。

⇩⇩⇩

学生：想像できない。

ファ：例えば、授業参観などで母親がパソコンを持ちながら「これがうちの夫です」と言うのかもしれない。

学生：それは子どもがかわいそうではないか。もしかしたら、ほかにもそのキャラクターと結婚している人がいるかもしれない。父親がかぶることがあるのではないか。例えば、授業参観で後ろに並んでいる母親たちが持っているパソコンの父親が全員同じ場合も考えられる。母親は違うのに父親が全員同じであるクラスメートは想像できない。

学生：VR の世界ではなかば現実化しつつある。コロニーの中で、誰が誰と結婚するかなど、ルールを決めればよい。

学生：子どもが大きくなったときに、自分の父親が「パソコン」だと知ったらショックではないか。

学生：家にいない父親よりいいのではないか。残業ばかりで家に帰らない父親よりは子どもがなつくのではないか。

学生：ダメダメなアンドロイドだったらどうしよう？いろんな人間がいるように、ダメなアンドロイドだったら子どもの成長に悪影響ではないか。

ファ：それは現実でもそうだから、片親だけでもしっかりしていれば大丈夫かもしれない。アンドロイドだからダメというわけではない。

学生：VR は夢の中での生活のように感じる。現実生活に戻れなくなるのではないか。現実と虚構の境界が曖昧化している。VR との結婚生活がリアル、現実の生活がフィクションになってしまうかもしれない。

以上が、グループ A の大まかな対話内容の再現です。意見の傾向としては、3 パターンがありました。

1.　積極的に賛成。

2.　　強く反対。
3.　　強く反対する理由もないが、わざわざ制度化する必要も感じない。

また、「現実」と「2 次元」で、考え方を変える人が多いように感じました。2 次元との結婚制度に賛成の人でも「2 次元における一夫多妻制を現実世界に適用できるか」と問われると、逡巡する様子が観察できました。

【グループ B】　ファシリテーター：平澤 孝枝

グループ B には、まず、この制度に「賛成」か「反対」かを尋ねるところからスタートしました。割合としては、ほぼ半々くらいで、若干、反対が多いようでした。

【賛成派の理由】
・別に否定することではない。誰かを好きになるのに制度は関係ない。
・恋愛は否定されるべきことではない。

【反対派の理由】
・ロボットならば良いが、2 次元キャラクターとなるとそのキャラクターを好きな人が他にもいる。
・人間が生物として繁殖できないような「物」と結婚するのはどうなのか。
・2 次元キャラクターは一方通行だから。

次に、理由を聞いたファシリテーターが気になる点をあげていきました。（以下、ファ：）

ファ：ロボットは良くて、2 次元キャラクターがダメなのはなぜか。
学生：ロボットは実物で大量生産が可能だが、１：１で関係が作れる。しかし、アニメや 2 次元キャラクターは、一人だけが対象になるのではなく、複数の人がそのキャラクターを好きになるからだと思う。
ファ：では、キャラクター性とはなにか。みなさんはアニメのキャラクターの何に惹かれるのか。
学生：声や声優の魅力に惹かれる。
学生：キャラクターの作中の行動に惹かれる。
学生：自分の予想外の設定。
学生：ロボットのキャラクターは自分で設定できる。また、決まった反応しかできないがアニメのキャラクターはすでに設定されているし、変えることもできる。
学生：それは人間も同じではないか。人間も会ったときにはすでにキャラクターができあがっているからアニメと同じだと思う。
学生：繁殖できないというけれど、繁殖できないのは同性婚も同じではないか。
ファ：よく考えると、ロボットの１：１は「一夫一妻」、2 次元キャラクターの１：複数は「一夫多妻」の形式だから結婚の形式は取れる。どうして形式は同じなのに「人」でないとダメなのだろうか。
学生：アニメの一夫多妻はキャラクターからの愛が与えられる。他の人も好きなキャラクターが一緒だ

と嫌なのではないか。

学生：キャラクターに対して独占欲がある。

ファ：結婚とはそもそもなんだろうか。法律だけのものなのか。なんのために我々は結婚しているのか。

学生：結婚は証明なのではないか。第 3 者に取られたくないという意識があるから結婚する。

学生：結婚することで安心、信頼できるから。そして子孫を残すためでもあると思う。

学生：自分の中で「結婚」という理想があるから。

学生：子供を産み、育てるために必要なのではないか。

学生：ロボットの場合は自分がロボットを買うから「購入」になる。でも結婚は「契約」みたいなものだと感じる。

すると、ここで変わった意見が出てきました。

学生：ロボットや 2 次元のアニメがパートナーの場合、著作権はどうなるのか。

学生：ロボットも自分が作る場合と他人が作った場合では権利はどうなるのか。製作者の意図を勝手に変えられると嫌だと感じるかもしれない。

学生：結婚しても自分は老いるけど、キャラクターやロボットは死なない。自分が死んだときにどうするのだろうか。

ファ：自分の死後は買った会社に戻す。それとも誰かに譲るのはどうか。

学生：それは「レンタル」みたいに感じる。

学生：自分で育てたロボットと結婚するとなると近親婚のように感じる。また、自分が死んだあとに一所懸命に育てたロボットやキャラクターが他人のものになると嫌かもしれない。でも、自分が育てたのだから幸せになってほしい気持ちもある。多くの人に好きになってもらいたいと思う。

ファ：それは親子のような気持ちにもなるということか？

学生：嫉妬や怒り、そうしたものを抑えるために「結婚」という法律があるのではないか。そうでないと「種」が廃れていく。

学生：ロボットやキャラクターは劣化しないが、自分が劣化したら彼らは他の誰かと結婚するとなると、みんなの恋愛とさして変わらないのではないだろうか。

ファ：誰かに取られたり譲ったりするのは、結局、恋人同士が付き合って別れて・・・という現実のものとあまり変わらないと思う。なぜ「人」だけが結婚というものに制度を求めるのだろうか。ほかの動物はどうだろうか。

学生：他の動物はリーダーという形態をとっている。「人」は、一人ひとりを尊重する。

ファ：でも、我々も会社や社会でリーダーを求めることがあるのではないか。

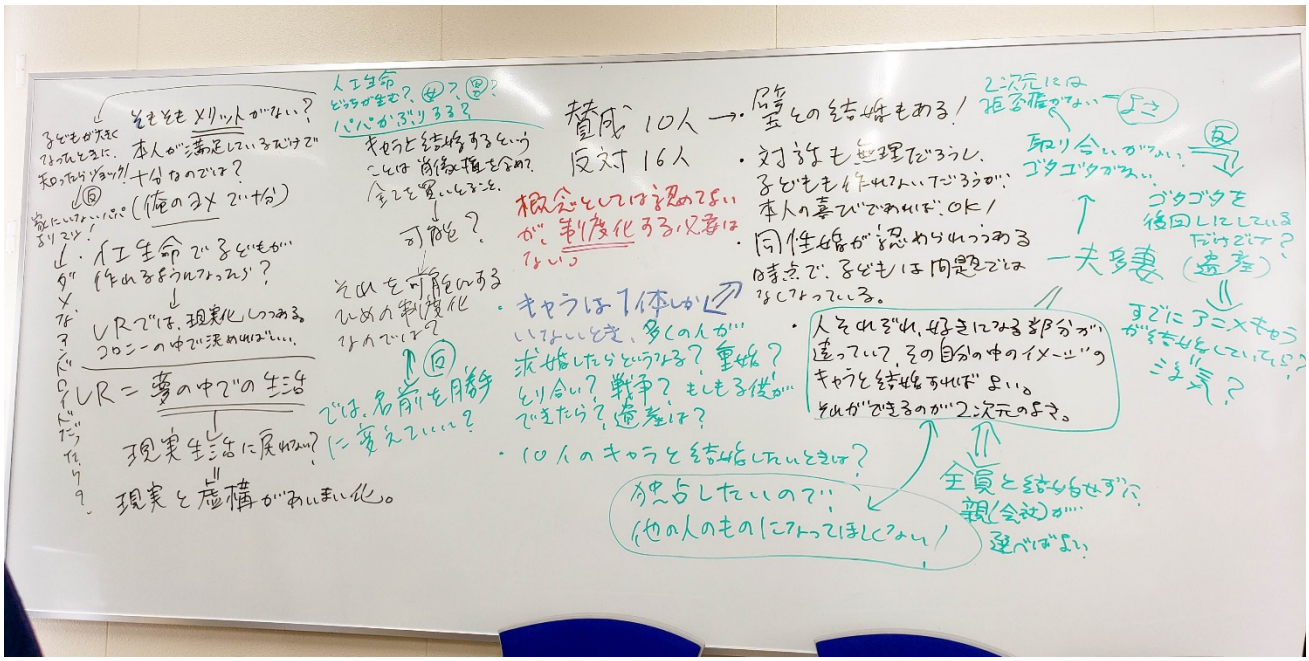
学生：人間は考えることができる動物だから。考えることができるから法律を作るのではないか。

ファ：怒りや他の雄や雌に取られることを嫌だと思う気持ちは、動物にもありそうだ。でも、考える動物なのにルールを作らないといけないなんて、人間は高等動物というわりには縛りがないとダメなんだね。他の動物はルールがなくても廃れない。

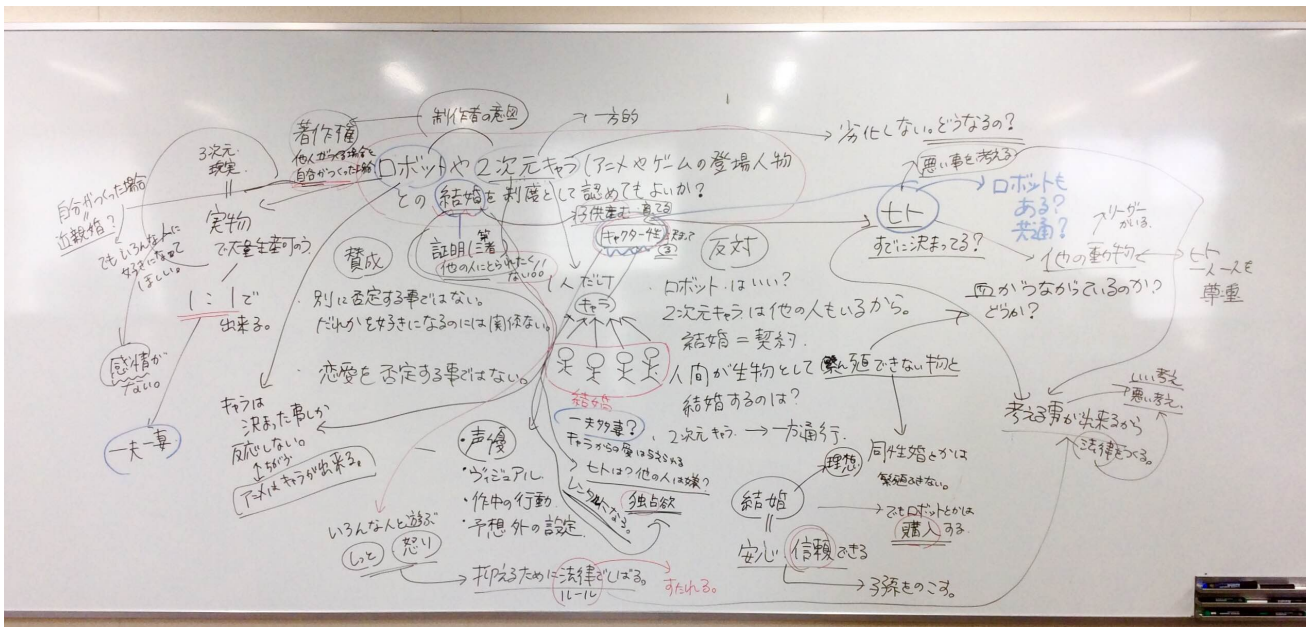
学生：それも人間が考える動物だからかもしれない。良い考えだけではなく、悪い考えも出てくると犯罪などに利用される。だから法律が必要になる。

議論が白熱していましたが、ここでタイムアップとなりました。一体、なんのために結婚という制度が

必要なのか。恋愛だけではいけないのか。続きは、学生たち自身に考えてもらいたいと思いました。



グループ A のホワイトボード



グループ B のホワイトボード